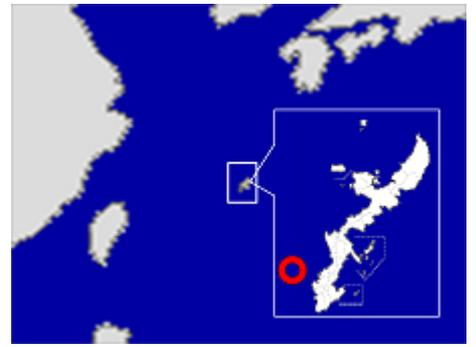


上里和子さん

1939(昭和14)年生まれ
当時の本籍地 沖縄県
民間人

沖縄・座間味島



●1944(昭和19)年10月 十・十空襲に遭い、座間味島に疎開

座間味島では大変大きなお家に両親が住んでいました。当時は日本軍が5~6名同居してたんです。私達も、いつも日本軍と一緒に、私は田中さんという兵隊さんに可愛がられて、いつも金平糖とか貰ってたんですね。

である日、サイレンが「空襲警報、発令—」ということで、みんな防空壕に走って逃げるわけです。何十列にもなったアメリカの軍艦が島を取り巻いてしまったんですね。そして、軍艦からも攻撃する、空からも攻撃されて、あの小さい島がもう地響きして形も無くなるんじゃないかと思うほど凄い攻撃を受けたんですね。

皆、火の波って言うのかな、そこから逃げようとしていたんですけど、どんと大きな玉がやって来て、私は滝壺の方に落とされてしまったんです。ところが、私の母は私が滝壺に落とされても振り無かったんですね。丁度物心ついた頃ですので、振り向きもしない母親ってのがね、私なんかどうでもいいのかという感じを持ち始めたんです。でも親を追っかけて行って、辿り着いたんです。

●1945(昭和20)年3月26日 座間味島に米軍上陸

このガマの近くに皆集まって来て、これが月夜の晩だったんですが、お月様が煌々と照っているんですが、壕の近くで、自分ひとり、おなかがすいて、何か食べられる物はないかなと外へ出て、でも食べ物は何もありませんので、アダンの木の下にカタツムリがあると、これを石で砕いて中の身をほじくって食べました。

父親が、御真影(ごしんえい)、天皇陛下の写真を守る人であったんですよ。だからいつも背中にしょってね、家族と一緒に歩くことは滅多に無かったけど、もう戦争が終わりそうだという時に、ひょいと父親が現れたんですよ。何人かの日本兵に支えられるようにして、片足を引かずするような歩き方で、私たちが隠れている壕の中に入って来たんです。その壕は200名ぐらいの村の人たちがひしめき合って、そこは座間味でも一番大きい自然のガマですけどね。

私の父が入って来たら、みんな、「先生」「先生」と寄って来るんですね。死は覚悟しなさいと言われた頃でしたけど、手榴弾がみんなに行き渡ってないんです。それで父は持っていました。それで最後の決意で、家族を何とか殺さないといけないという事だったんで、私の方は大変臆病で、母が綺麗な服を着せると、ああもう殺されるんだなと身をもって震え上がってね、外のほうへ飛び出して行くんです。「私は死なない、死なない」と。

そういうことが何回も繰り返されていたんですが、もう今度は父親が、これが最後だって。入ると同時に「和子はいるか」ってすぐ来たんですね。母親が「いるよ」って、「じゃあ服を着させなさい」って言われて綺麗な服着替えさせました。それと同時に、ああまたやるんだなと思って、私は「死なない！」って言って大声出したんですよ。それでガマの方から入り口に向かって走ったんですけど、ひしめき合って、なかなか出られないんですよ。

色んな方が集まって来て、「私も殺してください」「殺してください」とあっちこっちから寄って来たんですね。

●私はずーっと山手の方に一人で逃げて行っただけです。母が妹と弟をおぶって追っかけて来て、やっと私を捕まえて、もう壕に戻ることはなかったですが。

これは(絵中央下)田中さんという私のお家で一緒におられた兵隊さんですが、足が切れてしまってですね、こういうふうに横たわっていたんですが、私がじーっと見てたら、向こうもこっちを見て「和子さんだね」と言って手を振ったんです。母親がじーっと見て「ああ、田中さんだ」と。それが最後のお別れですね。



親が子供を追っかけて殺すという場面とかですね、若いお母さんがアダンの木に首を吊って、縄でぶら下がって、色んな場面を見たのでこれを一まとめに描いたわけです。

●母が、私を水溜りにぼんと爆風で落とされても振り向かなかったという印象が、戦後もずっと私を殺そうとしたんだと。だから、何て言うのかな、私を早く殺すのが目当てだったような気がしてですね。その頃から母親に対する凄い怒りと憎しみがあって、反抗期にはですね母にあまり話しませんでした。物心ついた時に、こういう親子の関係の場面があると、一生上手いかないなかなあと、私、自分のことからそう思いますね。(取材日:2011年2月6日)